

二〇二五年度入学選抜試験問題

国

語

(六〇分)

問題は□から■まで(21ページ)ある。

解答は、すべて別紙の解答欄に記入すること。

文字は正しくていねいに書くこと。

句読点も一字に数える。

— 1 —
次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

見えない人が「見て」いる空間と、見える人が目でとらえている空間。それがどのように違うのかは、一緒に時間を過ごす中で、ふとした瞬間に明らかになるものです。

たとえば、先ほど登場していただいた木下路徳さんと一緒に歩いているとき。その日、私と木下さんは私の勤務先である東京工業大学大岡山キャンパスの私の研究室でインタビューを行うことになっていました。

私と木下さんはまず大岡山駅の改札で待ち合わせて、交差点をわたってすぐの大学正門を抜け、私の研究室がある西9号館に向かって歩きはじめました。その途中、一五メートルほどの緩やかな坂道を下っていたときです。木下さんが言いました。「大岡山はやっぱ山で、いまその斜面をおりているんですね」。

私はそれを聞いて、かなりびっくりしてしまいました。なぜなら木下さんが、そこを「山の斜面」だと言ったからです。毎日のようにそこを歩き来していましたが、私にとってはそれはただの「坂道」でしかありませんでした。

つまり私にとってそれは、大岡山駅という「出発点」と、西9号館という「目的地」をつなぐ道順の一部でしかなく、曲がってしまえばもう忘れてしまうような、空間的にも意味的にも他の空間や道から分節化された「部分」でしかなかった。それに對して木下さんが口にしたのは、もっと俯瞰^{ふかん}的で空間 **A** をとらえるイメージでした。

確かに言われてみれば、木下さんの言う通り、大岡山の南半分は駅の改札を「頂上」とするお椀^{わん}をふせたような地形をしており、西9号館はその「ふもと」に位置しています。その頂上からふもとに向かう斜面を、私たちは下っていました。

けれども、見える人にとって、そのような俯瞰^{ふかん}的で三次元的なイメージを持つことはきわめて難しいことです。坂道の両側には、サークルカン^①ユウの立て看板が立ち並んでいます。学校だから、知った顔とすれ違うかもしれません。前方には混雑した学食の入り口が見えます。目に飛び込んでくるさまざまな情報が、見える人の意識を奪っていくのです。あるいはそれらをすべてシャットアウトしてスマホの画面に視線を落とすか。そこを通る通行人には、自分がどんな地形のどのあたりを歩いて

いるかなんて、想像する余裕はありません。

そう、私たちはまさに「通行人」なのだと思いました。「通るべき場所」として定められ、方向性を持つ「道」に、いわばベルトコンベアのように運ばれている存在。それに比べて、まるでスキーヤーのように広い平面の上に自分で線を引く木下さんのイメージは、より

B

なものに思えます。

物理的には同じ場所に立っていたのだとしても、その場所に与える意味次第では全く異なる経験をしていることになる。それが、木下さんの一言が私に与えた驚きでした。人は、物理的な空間を歩きながら、実は脳内に作り上げたイメージの中を歩いている。私と木下さんは、同じ坂を並んで下りながら、実は全く違う世界を歩いていたわけです。

彼らは「道」から自由だと言えるのかもしれませんが。道は、人が進むべき方向を示します。もちろん視覚障害者だって、個人差はあるとしても、音の反響や白杖はくじょうの感触を利用して道の幅や向きを把握しています。しかし、目が道のずっと先まで一瞬にして見通すことができるのに対し、音や感触で把握できる範囲は限定されている。道から自由であるとは、予測が立ちにくいという意味では特殊なシンチョウ②ウさを要しますが、だからこそ、道だけを特別視しない俯瞰的なビジョンを持つことができたのでしょう。

全盲の木下さんがそのとき手にしていた「情報」は、私に比べればきわめて少ないものでした。少ないどころか、たぶん二つの情報しかなかったはずです。つまり「大岡山という地名」と「足で感じる傾き」の二つです。しかし情報が少ないからこそ、それを解釈することによって、見える人では持ち得ないような空間が、頭の中に作り出されました。

木下さんはそのことについてこう語っています。「たぶん脳の中にはスペースがありますよね。見える人だと、そこがスーパ―や通る人だとかで埋まっているんだけど、ぼくらの場合はそこが空いていて、見える人のようには使っていない。でもそのスペースを何とか使おうとして、情報と情報を結びつけていくので、そういったイメージができてくるんでしょうね。さっきなら、足で感じる『斜面を下っている』という情報しかないの、これはどういうことだ？ と考えていくわけです。だから、見えない人はある意味で余裕があるのかもしれないね。見えると、坂だ、ということまで気が奪われちゃうんでしょうね。きつ

と、まわりの風景、空が青いだとか、スカイツリーが見えるとか、そういうので忙しいわけだよね」。

まさに情報の少なさが特有の意味を生み出している実例です。都市で生活していると、目にとらえる情報の多くは、人工的なものです。大型スクリーンに映し出されるアイドルの顔、新商品を宣伝する看板、電車の中吊り^{つり}広告……。見られるために^{しつら}設えられたもの、本当は自分にはあまり関係のない「意味」を持たないかもしれない、純粋な「情報」もたくさんあふれています。視覚的な注意をさらっていくめまぐるしい情報の洪水。確かに見える人の頭の中には、木下さんの言う「脳の中のスペース」¹がほとんどありません。

それに比べて見えない人は、こうした洪水とは無縁です。もちろん音や匂いも都市には氾濫していますが、それでも木下さんに言わせれば「脳の中に余裕がある」。さきほど、見えない人は道から自由なのではないか、と述べました。この「道」は、物理的な道、つまりコンクリートや土を固めて作られた文字通りの道であると同時に、比喩的な道でもあります。つまり、「こっちにおいで」と人の進むべき方向を示すもの、という意味です。

人は自分の行動を一〇〇パーセント自発的に、自分の意志で行っているわけではありません。知らず知らずのうちにまわりの環境に影響されながら行動していることが案外多いものです。

「寄りかかって休む」という行為ひとつとっても、たいていは寄りかかろうと思って壁を探すのではなくて、そこに壁があるから寄っかかってしまう。子どもの場合は特にその割合が高くなります。「いたずら」とはたいていそうしたものです。ボタンがあるから押したくなるし、台があるからよじ登ってしまいます。環境に埋め込まれたさまざまなスイッチがトリガー^{*}になって、子どもたちの行動が誘発されていきます。

いわば、人は多かれ少なかれ環境に振り付けられながら行動している、と言えるのではないのでしょうか。

あるトリガーから別のトリガーへとめまぐるしく注意を奪われながら、人は環境の中を動かされていきます。人の進むべき方向を示す「道」とは、「こっちに来なさい、こっちに来てこうしなさい」と、行為を次々と導いていく環境の中に引かれた導線です。

たとえば京都の桂離宮かつらりきやうに行くと、その場所どこを見るべきかというまなざしの行方ゆくえまでもが計算されていることに気づきます。人の行動をいざなう「道」が随所に仕掛けられているわけです。実際に訪れてみて、桂離宮というのはまるで舞踏譜*ふとうふのようだとしきりに感心しました。

桂離宮ではひとつの道が明瞭に引かれています。都市においては無数の道が **C** に引かれています。しかもその多くは、人の欲望に強く訴えてくる。真夏のかんかん照りの道にコーラの看板があれば飲みたくなってしまうし、「本日三割引き」ののぼりを見ればついスーパーに入って余計な買い物をしてしまう。その欲望がもともと私の中にあったかどうかは問題ではありません。視覚的な刺激によって人の中に欲望がつけられていき、気がつけば「そのような欲望を抱えた人」になっています。資本主義システムがカジョウ③な視覚刺激を原動力にして回っていることは言うまでもないでしょう。それを否定するのは簡単ではないしするつもりはありませんが、都市において、私たちがこの振り付け装置に踊らされがちなのは事実です。最近ではむしろ、パソコンのデスクトップやスマートフォンの画面上に、こうしたトリガーはゾウシヨク④しているかもしれません。仕事をするつもりでパソコンを開いたら買い物をしていた……よくあることです。私たちは日々、軽い記憶ソウシツ⑤に見舞われています。いったい、私が情報を使っているのか、情報が私を使っているのか分かりません。

こんなふうには、都市というものを、ひとつの巨大な振り付け装置として見てみる。そうすると、見える人と見えない人の「ダンス」の違いが見えてきます。中途失明の難波創太さんは、視力を失ったことで、「道」から、都市空間による「振り付け」から解放された経験について語っています。

「見えない世界というのは情報量がすごく少ないんです。コンビニに入っても、見えたところはいろいろな美味おいしそうなものが目に止まったり、キャンペーンの情報が入ってきた。でも見えないと、欲しいものを最初に決めて、それが欲しいと店員さんに言って、買って帰るといふふうになるわけですね」。

周知の通りコンビニの店内は、商品を配列する順番から高さまで、売り上げを最大化するための「振り付け」がもつとも周到に計算された空間のひとつです。うかうかしていると公共料金を払いに来たのについでにプリンを買ってしまったります。

ところが難波さんは、見えなくなったことで、そうした目に飛び込んでくるものに惑わされなくなった。つまりコンビニに踊らされなくなったわけです。あらかじめ買うものを決めて、その目的を遂行するような買い方になります。目的に直行するというのがむしろ人間のようですが、むしろ逆でしょう。むしろ個人差はあるでしょうが、見える人の手足が目の前の刺激に反応してつい踊り出してしまうのに対して、見えない人はもつとゆったり、俯瞰的にものごとをとらえているのかもしれない。

もちろん、難波さんも失明した当初は情報の少なさにかなりとまどったと言います。とまどったというより、それは「飢餓感」と言うべきものだったそうです。

「最初はとまどいがあつたし、どうやったら情報を手に入れられるか、ということに必死でしたね。(……)そういった情報がなくてもいいやと思えるようになるには二、三年かかりました。これくらいの情報量でも何とか過ごせるな、と。自分がたどり着ける限界の先にあるもの、意識の地平線より向こう側にあるものにはこだわる必要がない、と考えるようになりました。さっきのコンビニの話でいえば、キャンペーンの情報などは僕の意識には届かないものなので、特に欲しいとも思わない。認識しないものは欲しがらない。だから最初の頃、携帯を持つまでは、心が安定していましたね。見えていた頃はテレビだの携帯だのずっと頭の中に情報を流していたわけですが、それが途絶えたとき、情報に対する飢餓感もあつたけど、落ち着いていました」。

難波さんのこうした心理はもはや「悟り」にすら聞こえます。「意識にのぼってこない情報を追わない」という考えに至るまでの二、三年は、難波さんにとって、視覚を持たない新しい体がとらえる「意味」を、納得して受け入れるまでの期間だったと言っているでしょう。

見えないという条件で脳内に作られるコンビニ空間のイメージは、どうしたって見えていたときに目がとらえていたコンビニの空間とは違います。おそらくは、入り口と、よく買う商品と、レジの位置がマークされた星座のような空間でしょう。

「見えない世界の新人」のうちは、どうしてもこれを欠如としてとらえてしまっていた。しかし次第に、脳が作り上げたその

新しいコンビニ空間で十分に行動できることが分かってくる。そのことに納得して歩くことができたとき、踊らされないで進むことの安らかさを、難波さんは悟ったのではないだろうか。

さて大岡「山」の経験が示唆していたのは、見えない人が見える人よりも空間を大きく俯瞰的にとらえている場合がある、ということでした。普通に考えると、見える人の方が「見通す」ことができるので、遠くまで空間をとらえていそうです。

しかし、そのことによってかえって「道」にしばらくたってしまう。だからかえって見えない人の方が、目が見通すことのできる範囲を越えて、大きく空間をとらえることができる。視野を持たないゆえに視野が狭くならない。とんちみたいですが、²私たちの先入観を裏切る面白い経験です。

（伊藤亜紗『目の見えない人は世界をどう見ているのか』による）

【注】 ＊トリガー＝引き金。きっかけ。

＊舞踏譜＝舞踊（ダンス）を紙の上に記述する方法で、音楽という楽譜に相当する。

問一 〓線部①～⑤のカタカナを漢字に書き改めよ。

問二 空欄 **A** に当てはまる語として、最も適切な

ものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 全体 イ 内部

ウ 表面 エ 部分

問三 空欄 **B** に当てはまる語として、最も適切な

ものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 一般的 イ 開放的

ウ 空想的 エ 限定的

問四 〓線部1「脳の中のスペース」がほとんどありま

せん」について、次の各問いにそれぞれ答えよ。

I 「脳の中のスペース」とは何か。説明せよ。

II 「脳の中のスペース」がないとどのようなことになるか。説明せよ。

問五 空欄 **C** に当てはまる四字熟語として、最も

適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 三者三様 イ 縦横無尽

ウ 十人十色 エ 千差万別

問六 〓線部2「私たちの先入観を裏切る」について、次

の各問いにそれぞれ答えよ。

I 「先入観」とはどのような考え方か。説明せよ。

II 「先入観」を「裏切る」とは何に気づくことか。本文中の〓線部「振り付け装置」という語句を用いて説明せよ。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

小学五年生の透子^{とうこ}は、月に一回、祖父のおつかいで「文藝春秋」^{ぶんげいしゅんしゅう}（論文、報道記事、評論などが多数掲載された総合雑誌）を雪野書店に買いに行っていた。ある日、透子に不審者が近づいたところ、雪野書店のおじさんが注意し追いついてくれる。

「おじさん、怖い人だと思ってた」

思い切ってそう打ち明けると、おじさんはびっくりしていた。

「どうして？」

「いつもにらむから」

「ああ、いや……ごめん、そんなつもりじゃなかったんだよ」

大人の人に謝られたのは、初めてだった。

「おじさん、離婚して……離婚ってわかる？ 都会からひとりでこっちに戻ってきたんだ。奥さんだった人と子どもは都会に残って、月に一回くらい会いに行く。あなたと同じ年頃の娘だから、本をあげるとしたらどんなのが好きかなあって、ついつい見ちゃった。あなたが選んだ本を、あの子にもプレゼントしようと思ったんだ」

大人の人に「あなた」と呼ばれたのも初めてで、というか、ここで「あなた」なんて言葉遣いをする人を見たことがなく、おじさんは本当に都会から来たんだと感動した。それから、「文藝春秋」しか買わないのが申し訳なくなった。

「お小遣い、少なくて」

あたしが言い訳すると、おじさんは「いいいいいよ」と笑ってくれた。その日の帰り道、あたしは、おじさんに何かお返しをしなきゃ、と考えた。牛乳の膜が張りついたところは火傷^{やけど}していて、皮がぺろんとめくれてきた。指でつーつと剥^むいて食べるとうつつすら甘かった。

『かがみの孤城』^{こじょう}がいいと思う」

次の月、雪野書店に行ったあたしは、おじさんに堂々と伝えた。

「うん？」

「おじさんの子どもにあげたら喜ぶと思う。すごくおもしろいんだよ。学校に行けなくなっちゃった子が、ふしぎなお城に呼ばれる話なの。あたしは、学校の図書室で読んだ」

「へえ、そうなんだ。うちに在庫はあったかな……」

どれどれ、とおじさんは立ち上がり、「あった」と嬉し^{うれ}そうにぶ厚い本を持ってきてレジを打った。

「今度会った時、うちのお客さんからおすすめされたよって渡すよ。どうもありがとう」

大人の時から丁寧に「ありがとう」って言われたのは初めてだった。そうじゃなくても、すごく珍しい。あたしは馬鹿^{ばか}でどんくさいから。おじいちゃんとおばあちゃんがいつもそう言うし、あたしもそう思う。でも、きょうのあたしはおじさんのためになることをした。

「今度、また教えてあげるね」

「うん、よろしく頼む」

よろしく頼む、だって。¹すごい、あたし。

あたしはそれから、毎月の「給料日」には、おじさんに本をすすめてあげるようになった。『セロ弾きのゴーシュ』『黄色い部屋の秘密』『兎の眼』……おじさんはそれを買ひ、お店になれば注文する。おじさんの娘はいつも喜んで読んでくれるみたいで「チェロの音色を聞いてみたくなったって言ってたよ」とか「犯人がわかった時はあつと叫んじやったって」という感想を教えられるたびにあたしは嬉しくなった。

おじさんの娘は、とっても本が好きで頭がいいんだろう。あたしとは大違い。

本当のことを言うと、あたしはおすすめ本を一冊も読んだことがない。近所の悠介ゆうすけから聞いている。悠介は同じ年で、同じクラスで、いつも本を読んでいて、体育の授業はたいい見学している。身体が弱いらしい。悠介に「何読んどの？ どんな話？」と訊くと、面倒くさそうに教えてくれるから、あたしはそれを忘れないよう、すぐノートに書く。

「何でそんなこと訊くの」

何回めかの時、悠介はふしぎそうに尋ねた。

「おまえ、馬鹿なんだからどうせ読まないだろ」

「うん、よくわかんない。すぐ眠くなっちゃう」

あたしがけろっと答えたせいか、悠介のほう2が気まずい顔をしていた。あたしは悪口を言われるのに慣れているけど、悠介は悪口を言うのに慣れていない。

「本屋のおじさんに教えてあげてんの。悠介、雪野書店に行かないの？」

「品揃ぞろえ悪いじゃん。アマゾンかヨドバシで注文する」

「雪野書店だって注文すれば取り寄せてくれるよ？」

「遅いから」

みんな、何でもたくさん持つてて、早くしてくれるところが好き。それは馬鹿じゃなくてどんくさくないってことなんだろう。当たり前だよな、とあたしは思う。あたしのお父さんは最初っからいなくて、お母さんは、あたしが小学校に上がるちょっと前にいなくなった。最後に覚えてるのは、茶の間で低いテーブルに突っ伏ふして泣くお母さん。あたしに「あいうえお」を教えている途中で、五十音表をぐしゃぐしゃにして「あーっ、もう！」と叫び、泣き出した。「何でこんなのもわかんないのよお」と。

—— あんた、そんなんでこれからどうすんのよお。

あたしは畳の上にぺたんと座ったまま、何も言えなかった。何でひらがなを覚えられないのか、自分がこれからどうなるのか、ちつともわからなかったから。今はひらがなが読めるし九九も言えるけど、ほかのみんなはもっと先に行ってしまったてい

て、お母さんが帰ってきてきつとまた泣いちゃうだろう。

お母さんはあたしに「透子」と名づけた。おじいちゃんは「優秀の秀が入って、名前負けもいいとこだよ」と近所の人にこぼしていた。近所の人は、笑っていた。クラスのみんなは「透明人間の透」と言って、よくあたしのことが見えないふりをした。あたしが話しかけると「誰もいないところから声が聞こえる!」「こわーい」と騒ぎ、あたしの机にはプリントを回さない。あたしは別に平気だった。悠介はそういう時、³誰のことも見えていないように黙って本を読んでいたけど、いつも横顔が泣きそうに見えて、かわいそうだった。「気にしないでいいよ」と声をかけたら本当に泣き出すかもしれないと思うと何も言えなかった。あたしのせいで泣く人は、お母さんだけでたくさんだ。

中学、高校、とあたしはおじさんに本をすすめ続け、おじさんは素直に買い続けた。『舟を編む』『砂の女』『輝ける闇』『蒼穹の昴』⁴『深夜特急』『ライ麦畑でつかまえて』『朗読者』……。悠介は賢い子が行く高校に合格し、あたしは「名前を書けば誰でも入れる」という噂の高校を受け、実際、名前しか正解した心当たりがないのに合格できた。学校が離れても電車の路線は同じだからよく会った。「何読んでるの? どんな話?」というあたしの質問に、悠介は決まって面倒くさそうに答えた。でもシカトしたり「うるさい」と怒ったりは、しなかった。

高校を卒業した後は、地元の、おじいちゃんの知り合いが店長をしているパチンコ屋に就職が決まっていた。給料は安くてもいいから、とにかく雑用でも何でも、簡単な仕事を振ってやってくれ、とおじいちゃんは何度も頭を下げていた。おばあちゃん「高卒ってだけで御の字だ」と涙ぐんでいた。落ちこぼれが通う高校の中でもあたしはトップオブ落ちこぼれで、追試と補習を繰り返してどうにか三年で卒業できるようにしてもらえた。出席日数には問題がなかったのと、留年させたら先生たちも面倒だからだと思ふ。⁴あたしは、アマゾンやヨドバシにはどうやってもなれない。

パチンコ屋は好きじゃないけど、あたしにできる仕事があるんなら嬉しい。困るのは、悠介が東京の大学に行ってしまうことだった。おすすめの本が訊けなくなる。

二月の「給料日」、もう学校の授業はなくて、あたしはパチンコ屋の店長に連れられ、お店のいろんな人に「春からよろしくお願いします」と挨拶して回った。それから「卒業祝いにこれで打ってみな」と五千円札を一枚渡され、打ち方を教わった。めまぐるしいパチンコ台の電飾とけたたましい音にくらくらしながら、適当にハンドルを回したりボタンを押したりしていると、何がよかったのか、五千円は五万円くらいになった。店長は「すげえ、パチプロの才能あるんじゃない？」と一万円抜いて残りをあたしに渡してくれた。そんな大金を持ったのは初めてで、嬉しくないわけじゃないけど、これは「悪いこと」や「怖いこと」とどう違うのかと戸惑った。パチンコ玉がぎつしり詰まったドル箱は重たく、銀色の玉の山に手を突っ込んでざりざりかき混ぜると気持ちよかった。

お金をコートのポケットにしまつて、雪野書店に行った。最近悠介に会えていないから、本をおすすめできないことをおじさんにどうごまかそうかといういろいろ考えたけど、あたしの頭では思いつかなかった。店に着く頃には、雪が降り出していた。

「ああ、いらつしゃい、きようは遅かったね」

「うん」

あたしがおじもじしていると、おじさんはいつもの「文藝春秋」を差し出しながら、「ここ、閉めるんだ」と言った。

「え、なんで？」

「いやまあ、儲^もからないからねえ。父親から、この店はつぶさないでくれって頼まれてただけで、去年の暮れに死んじゃつてさ。おれ自身は、本屋に興味があつたわけじゃなかったし」

まあ、だから、そういうことで。あたしは、シヨックな顔をしていたのかもしれない。おじさんはひどく心苦しそだった。

「雑誌はさ、出版社に定期購読頼めば郵送してくれるから。おじいさんに教えてあげて」

「うん」

おじいちゃんはもう、「文藝春秋」を買わないだろう。今までだって、きつちり読み通したのを見たことがない。おせちを

あれこれつくづくようにばらばらと目を通したら、ぶ厚い雑誌は玄関先に積まれてそのうちごみに出される。

「寒いね。ホットミルク作ろうか」

おじさんがレジの内側から段差を上がって奥へ引つ込むと、あたしは店の中を見回し、雑誌や本のポスターとは違う貼り紙に気づく。

『二月末日をもって閉店いたします。長らくのご愛顧ありがとうございました。店主』

「愛顧」という難しい漢字には読みがながふってあったので読めた。「愛」がLOVEなのは知ってる。きつといい意味の言葉なんだろう。ご愛顧されなかったから閉めるのに。でも最後だから、いいことを言わなきゃ。あたしもお母さんに「ご愛顧ありがとう」って言ってあげればよかった。そしたらお母さん、あたしのことをちょっと見直してくれたかも。そんなことをほんやり考え、最後だから、レジの内側に回ってみた。おじさんがいつも見ていた景色だと思うと楽しかった。ちよろちよろするあたし、立ち読みする男の人、付録をチェックする女の人、絵本を選ぶちいさい子。おじさんはここで何人のお客さんを見てきたんだろう。

ふと足元に視線を落とすと、レジ台の下に段ボール箱が置いてあり、蓋がちよつと浮いて中身が見えていた。本の表紙だ。売れ残りかな。そういえば、本屋さんは閉店セールとかしらないだろうか。ちらつと覗く表紙に見覚えがあったので、あたしはそつと蓋を持ち上げる。やつぱり。

先月、あたしが(悠介から聞いて)すすめた、『細雪』の文庫本。これで「ささめゆき」って読むなんて、日本語は本当に難しい。その隣には『ソロモンの偽証』。あたしが、先々月すすめた。その隣には『に榎家の人びと』『五番目のサリ』『82年生まれ、キム・ジヨン』……全部、見覚えがあった。本を持ち上げてその下を確かめても、あたしが教えた本ばかり。どういうこと？

わけがわからず中腰のまま固まっていると、おじさんが戻ってきた。振り返ったあたしと目が合い、「見た？」と笑う。牛乳の膜みたいになにやつと頼りない笑顔だった。

「ねえ、娘は？ 本、渡さなかったの？」

あの感想は、全部嘘^{うそ}だったの？ 自分こそずっと嘘をついてきたくせに、あたしはちよつとむかついていた。

「渡せなかったんだ」

おじさんはぼつとつぶやいた。顔に落ちてきた雪の粒みたいに、たちまちつめたく溶けそうな声で。

「月一回、必ず会えるはずだったのに、奥さんだった人はどこかに行ってしまった。黙って引越して、電話番号も銀行の口座も変えて、どこでどうしてるのかわからない」

「なんでそんなひどいことするの？」

「わからないだよ」

マグカップから昇る白い湯気の向こうで、おじさんの目鼻口がどんどん薄くなっていく。のっぺらぼうになって、どんな表情なのか見えない。あたしがごしごし目を擦^{こす}っても。

「離婚しても、親同士ではいようって約束したのに。何がいけなかったのか、どうすればよかったのか、どんなに考えてもわからないんだ。苦しいのに、あなたを見るとあの子を思い出して、考えずにいられない。とっさに嘘をつく、あなたは本をすすめてくれた。嘘だと言えなかったから、自分で読んで、娘の感想のふりで伝えた。それがずっと続いてしまった。申し訳ない」

「全部、読んだの？」

「うん」

すごい。違う。あたしがすごくないんだ。おじさんはあたしと違って馬鹿じゃないから、当たり前前に読めるんだ。急に、自分が馬鹿であることが悔しく、恥ずかしく思えた。

「全部読んだけど、どうすれば娘にまた会えるのか、自分の苦しさが楽になるのか、どこにも書いてなかったよ」

「じゃあ意味ないじゃん」

「そんなことはない。物語の中にいろんな苦しみや喜びがあった。今まで味わったことのないたくさんさんの感情に出会えて、自分とは違うのに、おんなじだと思えた。みんな等しく、それぞれの何かを背負う。重さや年月は問題じゃない。だからもう、

苦しみから逃れようとして苦しむのをやめた」

「わかんないよ」

あたしは言った。

「馬鹿だから、わかんない」

「あなたのおかげだ、ありがとう、つてことだよ。本屋はつぶしちゃうけど、これからも本を読むと思う。今度は、自分で選んで」
おじさんは、あたしの嘘を知っていたのかもしれない。こんな狭い町だから、あたしが馬鹿なのはみんなに広まつる。

「『あなた』じゃない、透子だよ」

「透子さんか、いい名前だね」

「透明人間だから、いてもいなくても一緒ってこと」

「そんなことはない」

おじさんは怒ったような、でも怒ってはいない顔で言った。

「そんなわけがない」

（中略）

百円とか二百円はすぐなくなっちゃうから、もっとたくさんのお金で、梅ジャムせんべいでもビッグカツでもない、何かきららしたものを買ったかった。そうしたら、馬鹿なままでも生きていけそうな気がしていた。

「段ボール箱にある本、あたしに売って」

「これは売り物じゃないよ」

「⁶じゃあ、お店の棚から同じもの売って」

あたしはそう言い張り、約七年ぶんのおすすめ本をできる限り揃^{そろ}えてもらった。四万円ちよつとになった。おじさんは「この店の過去最高売り上げだ」と、長いレシートが出てくるのを喜んで見ていた。ぱんぱんの紙袋を両手に提げ、あたしは店を

出た。持ちきれなかったぶんは、あした届けてくれる。

「透子さん、元気でね」

おじさんは——おじさんも、この町を出て行くのかもしれない。おじさんがなくなったたら寂しいけど、そのぶん、ここにいないおじさんが、どこかで娘に会えているかもって自由に想像できる。お母さんも、あたしから離れて、どこかで楽しく暮らしてるかもしれない。そうだったら嬉しい。そっか。いなくなつて透明になった人のことは、幸せなふうに考えられるから、いい。

「おい」

歩き出してすぐ、声をかけられた。悠介だった。

「なに、その荷物」

「本」

「全部？」

「うん」

悠介は片方の紙袋を強引に取り上げ「おも」と顔をしかめた。

「そっちも貸せ」

「重いからいいよ」

「重いから持つんだよ」

「いいってば。パチンコ屋でドル箱いっぱい運ばなきゃいけないだし、今から練習」

抵抗したけど、結局両方とも奪われてしまった。あんなにひ弱だった悠介が、いつの間にこんなにたくましくなっていたんだらう。

「本なんか大量に買ってどうすんだよ」

「どうしよう」

「何だそれ」

「欲しかったの。でも、きつと読めない。どうしよう。あたしも本から教えてほしいのに」

悠介は何か言いかけて、ぐつと飲み込んだ。「馬鹿」つて言おうとしたのかもしれない。飲み込んだあと、ミルクみたいに白い息を吐きながら「教えてやるよ」と言った。

「俺が、全部、説明してやる」

「すぐ忘れちゃう」

「したらまた教える」

「東京行くんでしょ」

「行くけど、できるよ」

おじさんみたいに、約束を破られたらどうしよう。悠介を信じていられる方法は、悠介があたしをご愛顧してくれる方法は、この本たちのどこかに書いてある？ あたしはおじさんに訊きたくなって来た道を振り返った。「雪野書店」の文字は、途切れ途切れの雪の流れと混ざって読めない。

⁷「悠介、透明にならないでね」

あたしは言った。

⁸「あたしのことも、透明にしないで」

「そんなことできたら、俺はノーベル賞もらってるよ」

そういう意味じゃない、けど、うまく説明できそうにない。悠介のコートの袖口をつかむと、悠介は一瞬びくつとして、でも振り払わなかった。まつげに降ってきた雪が溶けて視界がぼやけ、見慣れた町の寂しい明かりがにじんで見える。

（一穂ミチ『うたかたモザイク』所収「透子」による）

問一 ― 線部 1「すごい、あたし」とあるが、このときの「あたし」は何に対して「すごい」と思っているのか。説明せよ。

問二 ― 線部 2「悠介のほうが気まずい顔をしていた」とあるが、それはなぜか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 自分の悪口に言い返されることなく、素直に認められたから。

イ 好きだから悪口を言ったことに気づかれて、かわされたから。

ウ 自分で言った悪口が、自分のことを示しているように感じたから。

エ すぐ眠くなるのに本の内容を聞かれることが、かわられている気がしたから。

問三 ― 線部 3「誰のことも見えていないように黙って」とあるが、ここから読み取れる悠介の気持ちとして適切なものはどれか。次の中から選び、記号で答えよ。

ア 透子を透明人間のように扱ういじめに対する嫌悪感。

イ 透子を他の子と区別しないように扱おうとする気配り。

ウ 透子を好きなことを周りに気づかせないだろうかという不安。

エ 透子を守ってあげたいけれど守ることのできないもどかしさ。

問四 ― 線部 4「あたしは、アマゾンやヨドバシにはどうやってもなれない」とあるが、ここでの「アマゾンやヨドバシ」とはどのような意味か。本文中から二十字以内で探し、はじめの五字を書き抜け。

問五 ——線部 5「自分こそずっと嘘をついてきたくせに、あたしはちよつとむかっていた」とあるが、透子のついた嘘と、おじさんのついた嘘の内容を、それぞれ簡潔に説明せよ。

問六 ——線部 6「じゃあ、お店の棚から同じもの売って」とあるが、透子はパチンコで手に入れたお金で「四万円ちよつと」も買い物したのはなぜか。透子の「大金」に対する意識を明らかにして、説明せよ。

問七 ——線部 7「悠介、透明にならないでね」——線部 8「あたしのことも、透明にしないで」とあるが、それぞれ「透明」の意味をあきらかにして、ここでの透子の気持ちの説明せよ。

三

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

今は昔、小野篁そのたかむらといひける人、愛宕寺あたごでらを造りて、その寺の料れうに、^{*}鑄師ちようしを以て鐘を鑄いさせたりけるに、鑄師がいはいく、「この鐘をば、つく人も無くて、十二時に鳴らさむとするなり。それを、かく鑄て後、土にほり埋うづみて三年あらしむべきなり。今日より始めて、三年に満てらむ日のその明けむ日、ほりいだすべきなり。それを、¹或あるは日をたらしめず、或は日を余してほり開けたらむ、しかつく人も無くて十二時に鳴ることはあるべからず。しかる構かまへをししたるなり」といひて、鑄師をかへり去りにけり。

さて、土にほり埋みてけるに、その後、^{*}別当べつたうにて有りける法師、二年を過ぎて、三年といふに、²未だその日にも至らざりけるに、え待ち得ずして、心もとなかりけるままに、いふ甲斐かひ無くほり開けてけり。しかれば、つく人も無くて十二時に鳴ることは無くて、³只有る鐘ただにてあるなりけり。「鑄師のいひけむ様に、その日ほりいだしたらましかば、つく人も無くて十二時に鳴らなまし。さ鳴らましかば、鐘の音の聞き及およばむ所には、時をもたしかに知り、⁴めでたからまし。⁵いみじく口惜くちをしきことしたる別当なり」となむ、その時の人いひ誇そしりける。

⁵しかれば、騒さわがしく物念じせざらむ人は、必ずかくつたなきなり。心愚おろかにて不信なるがいたすところなり。
世の人、これを聞きて、ゆめゆめ不信ならむことをばとどむべし、となむ語り伝へたるとや。

(『今昔物語集』による)

【注】 * 寺の料 寺で使うために。 * 鑄師 鑄物師。溶かした金属で物を作る職人。

* 別当 寺の管理をする役職の僧。

問一 愛宕寺の鐘の、——線部1「しかる構へ」と——線部

2「その日」について、以下の問いに答えよ。

I 「しかる構へ」とは、どのような鐘になるということか。簡潔に説明せよ。

II 「その日」とはいつか。本文中から十五字で探し、はじめの五字を書き抜け。

問二 ——線部3「めでたからまし」とあるが、どのような

点が喜ばしかっただろうと言っているのか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

A 愛宕寺には、とても信心深い別当がいることがわかった点。

I 土の中に物を入れておくと、仏の助けが得られるという点。

ウ 鐘の音が聞こえる所では、きちんと時間がわかるようになる点。

E すばらしい鐘を作った者として、鋳師の名前がずっと残るという点。

問三 ——線部4「騒がしく物念じせざらむ人」とはどのよ

うな人物か。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

A 大きな声で騒ぎたてる、迷惑な人。

I 落ち着きがなく、忍耐力のない人。

ウ うわさ話をひろげて、目立ちたがる人。

E 仏を信じる心が弱く、物を大切にしない人。

問四 ——線部5「世の人」は、どのような教訓をこの出来

事から導き出したか。簡潔に説明せよ。

